

様式第2号

視察研修先	宮城県南三陸町議会	氏名	柏倉 信一
視察研修項目	震災からの復興及び防災について		
<p>宮城県北東部に位置する南三陸町、面積163.40キロ㎡、東西、南北とも約18km東は太平洋。西・北・南西を山麓に囲まれた人口12,370人（平成27年国勢調査）が暮らす街である。この街を2011年3月11日あの東日本大震災が襲った。死者行方不明者合わせて831名、全壊・大規模半壊合計で3321住宅が甚大な被害を受けた。</p> <p>復興の第一歩は、災害廃棄物の処理から始まったとのこと、その量は推計で72.3万トン、通常であれば、160年分の処理を3年で処理したことになる。想像もつかない膨大な量である。</p> <p>当然のことながら避難所の運営は長期にわたり、広域的な避難所として近隣市町の宿泊施設に避難するまでの間、町職員だけでは運営できず人手不足なところは災害ボランティアや町民が主体となって運営したとのこと。現在は新たな街づくりを進め津波の被害を受けた地域は高台に移転が完了しているため、今後はこうした避難所の運営が長期化することはないのではとのこと、是非そうであってほしいものだ。防災備品は、食料・生活用品などを計画的に備蓄しているようで、近年の新型コロナウイルス対応で感染症対策に必要な資機材も備蓄している。自主防災組織の活動状況をみると、69行政区のうち48行政区が設立しており、組織化率は約70%でやはり、災害が発生する可能性の低い行政区は設立の動きは鈍く、ほぼ頭打ちと推測されるが設立された組織の活動状況は約90%とのこと、やはり実際に被害を受けた地域は活発だ。ただ福祉避難所はまだ設けていないとのこと。不安が残るところである。南三陸町の復興は震災から11年が経過し「住まいは高台に」を基本原則として住宅造成に取り組み100%完成。学校・公民館・図書館・南三陸病院・総合ケアセンター・拠点施設・役場庁舎とほぼ完成している。今後は全国有数の養殖場であった水産業が復活して、完成している南三陸町地方卸市場が活気を取り戻し本来の元気な街にもどることを期待したい。</p>			

様式第 2 号

視察研修先	宮城県気仙沼市議会	氏名	柏倉 信一
視察研修項目	震災からの復興及び防災について		
<p>宮城県の最北端に位置する気仙沼市、震災前の人口 74,247 人、現在は、59,662 人。面積 332.44 キロ㎡。</p> <p>私たちが視察の会場として迎えてくれたのは、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館、震災の記憶と教訓を伝え、警笛を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、気仙沼市が目ざす「津波ゼロのまちづくり」に寄与することを目的として残されている施設である。視察項目について説明をしてくれたのは、危機管理課の課長補佐だったが、この施設の説明案内をしてくれたのは、被災当時の危機管理課長だった伝承館の館長芳賀氏、震災当時の指揮官、一つ一つが当時を彷彿とさせるリアルなものだった。この施設は当時「気仙沼向洋高等学校」。当時（東日本大震災当時）向洋高校には生徒・教師・工事関係者（校舎の後方に高校を新築予定の為、建設中だった）約 250 名がいたとの事。校舎は海から約 150m、海拔 0～1 m くらいの立地条件下で 13m を超す大津波に襲われながら、臨機応変な迅速避難で誰一人犠牲にならなかった、(地震発生から 5 分後には避難行動に入ったとの事、避難先も僅かな時間に三か所も移動し、全員が避難することができた。)まさに奇跡となった建物である。日頃から校舎の地理的な条件を視野に避難訓練を実施していたことが功をそうした。伝承館では、津波に流される光景を映す動画、被災からわずか 11 日後、避難所となった地元中学校で開催された卒業式（中学校は、避難所に指定されていたので、卒業式会場の校舎体育館では、避難者が多くいる中で、卒業式が行われた地元中学生の答辞は感動を誘う素晴らしい内容であった。この度の視察で、非常事態に備えた訓練の大切さ、予想をはるかに超えた自然災害への対応の難しさ等、そして復興に向けた取り組み等大変有意義な視察であった。</p> <p>また、この度の視察では、寒河江市から気仙沼までの移動であったが、交通費は 3,500 円であがった。ただ、公共交通機関を全て使った移動をおこなったが、一日の視察が一か所しかできない。被災地周辺が J R 全線開通になっていないこともあるが、バスで 2 時間・電車で 3 時間の移動ではあまりに非効率ではないのかと思った。今後の検討課題ではないだろうか！念の為記すが行程を提案してくれた方に対する苦情ではない。議会としてこうした移動手段に対する問題提起である。</p>			